

夢というベクトル、家族という最小単位

岩田 将英

日本の子どもはいつから無邪気に夢を語らなくなったのだろう。

今回の海外教育視察の目的、あるいは今の自分の問題意識として子どもの夢をとりあげた。

夢とは自分の生きていく方向を示すベクトル、そして今生きている瞬間に意味をもたせるものとして存在すると私は考える。

「私はポエトリーが好き。だから私は作家になりたいの。」

ボンダイビーチ小学校の女の子が、強い意志を帯びた目を輝かせて言った。

「私は体操の選手になるの。」

「私は...」

3人の女の子たちは次々に夢を語る。その前向きな姿勢に文化的な違いを感じながらも、私はなぜそのように子どもたちがポジティブに生きているのかについて知りたくてたまらなかった。そこでボンダイビーチ小学校のグレーアム・ロス校長にその訳を尋ねた。

「それは私たち教師が子どもたちの才能をみつけて、そこをフォーカスしていくからですよ。そうすると子どもたちは自分の才能に気づいてそれをさらに伸ばそうとしていきます。それが教師の醍醐味です。面白いですよ。」

そしてさらに滞在先のレイリー夫妻にも尋ねてみた。

「うーん、それはたぶん親が子どもの話を聞いてあげるからじゃないかな。子どもが何に興味を持っているのかとか、何に挑戦しているのかとか、絶えず子どもを見守って褒めたりして声をかけているからだと思うよ。」

社会の閉塞感や若年犯罪の増加はオーストラリアも日本と同様である。しかし子どもの夢が自由に行き交う社会には、長いトンネルの先の光のような救いがあるように私は思えた。

そして教育視察のもう一つのテーマに家族を据えた。新しく家庭を築いた今、もう一度家族とは何か、新たに夫婦とは何かというテーマについて考えることにした。

オーストラリアの離婚率は高く、結婚した3組に1組の割合で離婚している。この離婚率の高さの訳を先程のレイリー夫妻の夫、ノエルさんに聞いてみた。

「最近の若い夫婦はたった1つの口げんかで離婚しちゃうんだよ。たった1つの問題でね。そんなこと言ったらうちの夫婦はすぐにでも離婚になってしまう(笑)」

レイリー夫妻はイギリスから移住をしてくる船の上で知り合ったという、まるで映画のような馴れ初めも話してくれた。孫の話、そして下の娘さんが近々結婚する話もしてくれ

た。そのように永く夫婦を続けてきたレイリー夫妻の円満の秘訣を、奥さんのメアリーさんに聞いてみた。

「まずお互いが良き友人であること、そして旅行へ行ったりして二人でいることを楽しむの。何よりもコミュニケーションをよくとることが大事。」

今回の教育視察をとおして、「子どもの夢」「家族」について考えを深めることができた。

そこで学んだことを目の前にいる我がクラスの子どもたち、そしてこれからふれるであろう子どもたちに還元していきたい。



ボンダイビーチ小学校「わたしについて」の授業の1コマ（撮影：筆者）